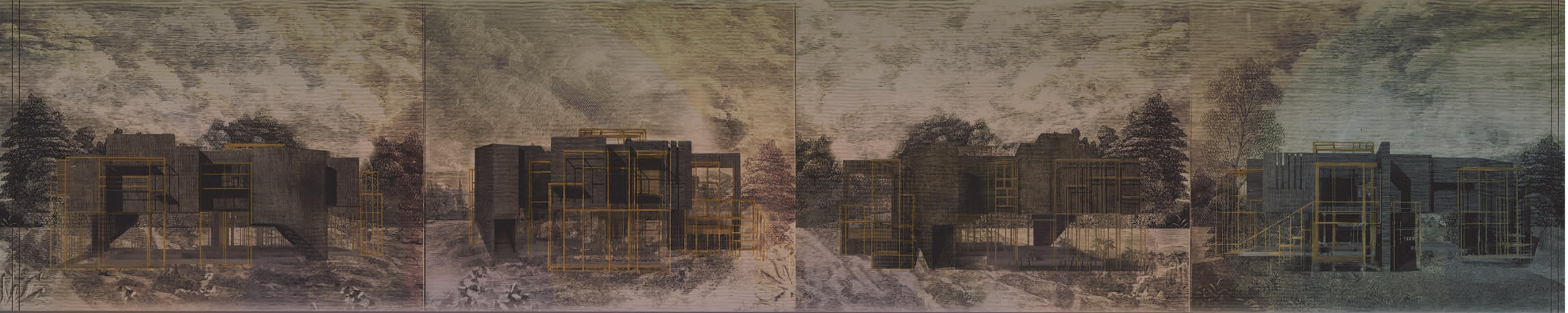


# 遺品の追憶

津波で被災した祖母の家には、長年大事に扱ってきた数々の遺品と建物の基礎だけが取り残されていた。

元々あった建物の基礎と当時の祖母の遺品への振る舞いを手がかりに、亡くなった祖母の遺品の記憶を我々が追体験するための建築を設計する。

遺品の記憶を経験として具現化し共有することで、祖母の遺品への愛がまた別の人へ伝搬し、被災前に失われてしまったこの場所の記憶が忘れることを克服する。



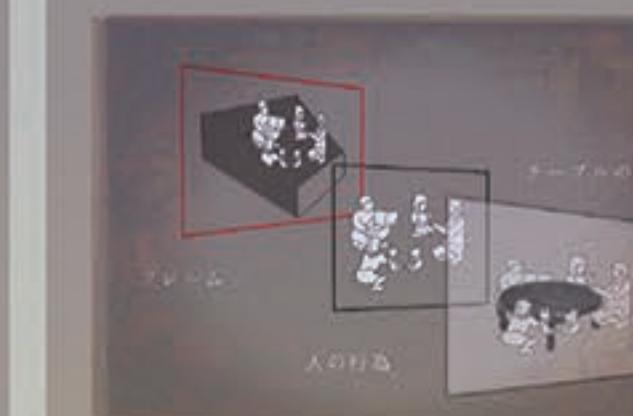
01

SITE



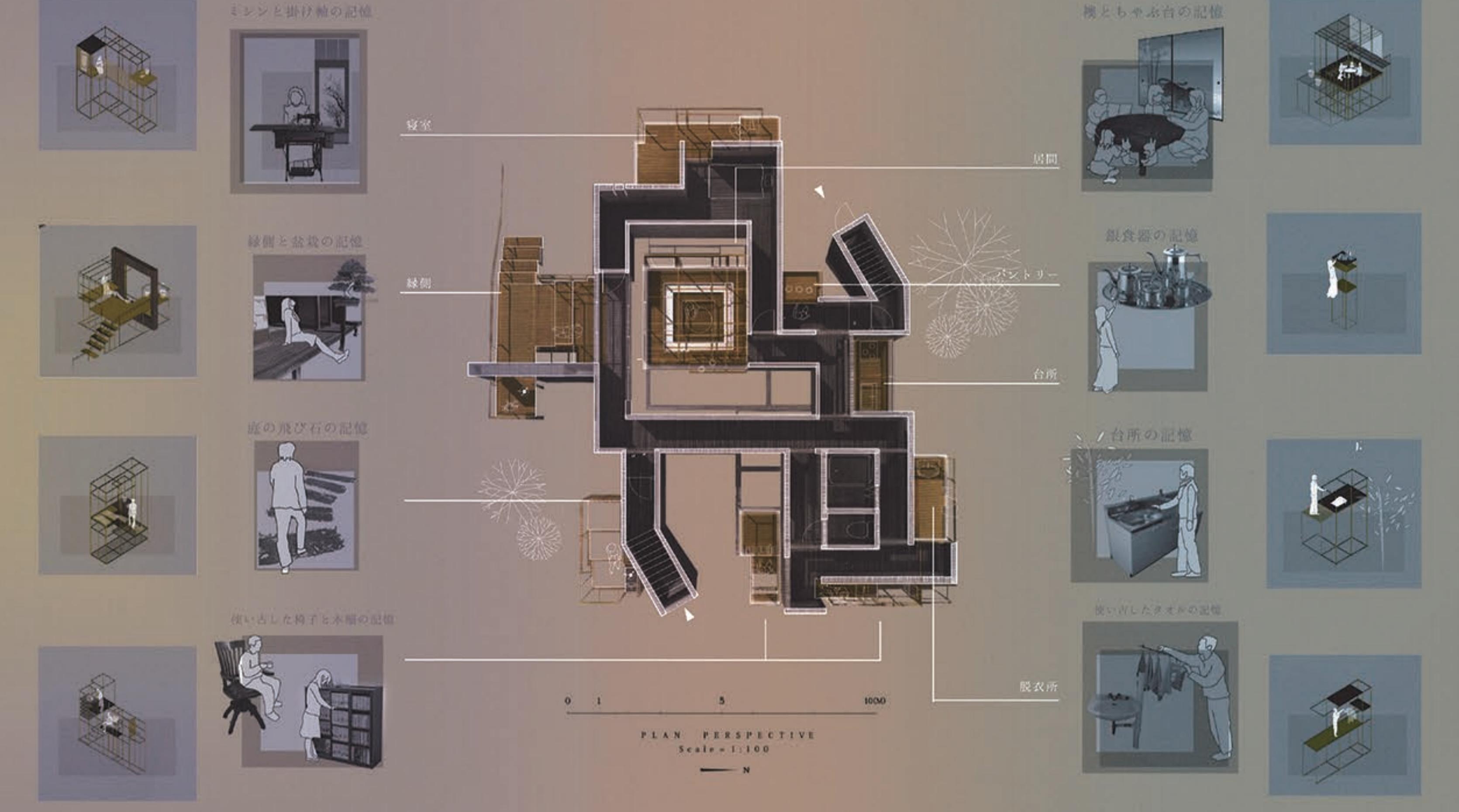
敷地は、宮城県仙台市荒浜区。津波により上部の戸建が破壊され、建物の基礎と遺品が残った状態であった。敷地周辺では防災機能を持つ復興公園を新たに計画しているが、当時の住人の暮らしと場所のコンテクストが消えてしまう恐れがあるだろう。既存の文脈の遺跡を基にし、住んでいた人の記憶を復刻する建築意匠を計画する。

02



当時の祖母の背中を見て感じ取った遺品への振る舞いの記憶を元に人の行為を誘発したアフォーダンスを利用した記憶の探し方とする

05



03



当時の祖母の日常動線を基にかたどった黒いボリュームを宙に浮かべる。幅は900mmにし、諸室を結ぶ動線として機能する。その動線沿いに祖母の遺品を置いた祖母の記憶を追体験する装置としての黄色のフレームを外部に面して配置する。動線とアクションを明確に分離することで、他の遺品や諸室の経験以外の要素を排除し、またそれが外部に表出することで記憶を復刻したショウウインドウとなる。

04



2200mm浮かせたボリュームの下は通行人が通ることができ、黒い動線のボリュームと遺された基礎を頼りに震災前の住人の経験を追憶するパブリックなメモリアルスペースになる。

ID:0247